

スポットライト SPOTLIGHT

—今をきらめくひと—

vol.2

今回は、昨年行われた第79回国民スポーツ大会（国スポ）の弓道成年男子遠的で県代表として出場し、県勢で16年ぶり4度目となる優勝を飾った徳永龍哉さんを紹介します。

ただ、一射に集中____。 目指すは国スポ連覇。



徳永 龍哉 (22) Tokunaga Tatsuya

平成15年小川町生まれ、在住。中学3年で全国大会に出場し、個人の部で準優勝、技能優秀賞を受賞。高校1年で全国選抜大会に団体で出場し準優勝、技能優秀校に選出。高校3年ではインターハイ団体出場を果たし、再び技能優秀校に選ばれた。国民スポーツ大会では、令和6年から2年連続で県代表として出場。

自身の強みを「粘り強さと負けず嫌いな性格」と語る徳永さんは、「正解がないこと」だと言う。うまくいったことが突然できなくなることもある中、初心を忘れず、一射一射を大切にしてきた。「自分自身にブレない芯を持つこと」。ど



高校時代の後輩と共に今も練習を行なう

張り詰めた空気が漂う静寂の中、放たれた矢が的を正確に射抜いていく——。昨年行われた第79回国民スポーツ大会成年男子遠的（60m）にある直径1mmの的を射る団体競技の部で、熊本県代表として出場し、見事優勝を果たしたのは、徳永龍哉さん。社会人として働きながら競技を続け、頂点に立った実力者だ。

徳永さんが弓道を始めたきっかけは、3つ年上の兄の影響。中学で弓道部に入部し、競技生活がスタート。中学3年で全国大会に出場し、高校、社会人と華々しい実績を積み上げてきた。

令和6年に初めて国スポの県代表に選出されたが、遠的の部で8位という結果に。悔しさを胸に猛練習を重ね、翌年の国スポで再び県代表に選出され、優勝をつかみ取った。

令和6年に初めて国スポの県代表に選出されたが、遠的の部で8位という結果に。悔しさを胸に猛練習を重ね、翌年の国スポで再び県代表に選出され、優勝をつかみ取った。

んな場面でも平常心で、練習通りの射を打つことを信条としている。そんな徳永さんが今でも大事にしているのが高校時代の恩師から贈られた「我射我中」という言葉。弓道の格言「正射必中（正しい射法なら必ず当たる）」をアレンジしたこの言葉には、「人それぞれ骨格が違うのだから、自分に合った型を見つけ出せれば必ず当たるようになる」という教えが込められている。今もこの言葉を胸に競技に向き合っている。高校の後輩の茅野麗司さんは「何度も同じ型で打つことのできるお手本のような射法の美しさと、練習への意識の高さと密度は本当にすごい」と語る。

「次の国スポでは遠的2連覇、そして近的の部でも優勝を目指す」と話す徳永さんの挑戦はこれからも続く。

正しく知ることから —ハンセン病問題・水俣病問題を現地で学ぶ—

□ 人権啓発課 ☎32-1708

10月31日 菊池恵楓園で学ぶ旅

県が実施しているハンセン病問題啓発事業「菊池恵楓園で学ぶ旅」に関係職員が参加しました。

菊池恵楓園歴史資料館および園内を見学し、療養所内での当時の生活状況や過去の誤った強制隔離政策によって社会に広がった差別・偏見の実態を学びました。

入所者自治会の太田明会長代行は「絶対に差別・偏見を許してはいけない」とお話しされとともに、歴史を後世に伝えるための活動を課題としてあげられました。



資料館のガイダンスの様子

「菊池恵楓園で学ぶ旅」を募集しています

日程 3月27日（金）※雨天決行

内容 菊池恵楓園歴史資料館見学・園内見学・
入所者自治会による講話

定員 40人 ※応募多数の場合は抽選

申込期間 2月2日（月）～2月27日（金）

□ 熊本県ハンセン病問題相談・
支援センター「りんどう」

☎ 096-365-7606

FAX 096-285-7762

メール kumarindou2020@gmail.com

12月16日 水俣フィールドワーク

市は、（一社）水俣病を語り継ぐ会の吉永利夫さん、吉永理巳子さんの案内による、水俣フィールドワークを実施。関係職員が参加しました。

JNC（株）水俣製造所、茂道地区、親水護岸を見学し、歴史的背景や水俣湾の現状などについて学びを深めることができました。その後、水俣病犠牲者慰靈碑で、犠牲者へ哀悼の意を捧げました。

（一社）きぼう・未来・水俣への訪問では、支援者の加藤タケ子さんから水俣病の社会的教訓を、胎児性水俣病患者の長井勇さんから「兄と同じ学校に行きたかった」と、松永幸一郎さんから「二度と水俣病を繰り返してはならない」と水俣条約会議で世界の人々に訴えたことについて詳しくお話を聞きました。

慰靈碑に哀悼の意を捧げる市職員▶



◀（一社）きぼう・未来・水俣へ訪問し、話を聞く様子（正面右から加藤さん、松永さん、長井さん）

今年度に実施した現地研修など多くの研修を通して、今も続くハンセン病問題・水俣病問題を正しく理解し、学び続けることで、より一層人権啓発に取り組んでいきます。